サポーターからの投稿

東北再訪　震災後七年の海岸線をたどる

CNCP サポーター、東京都職員
須田 光郎

震災から七年たった平成三〇年七月、そろそろ大震災も世間の記憶から薄れてきた折、久しぶりに東北地方を訪ねることにした。

今回は休みもあまりとれないので二日間の強行スケジュールで宮古市田老地区から福島県相馬市までほとんど車中で過ごす旅であったが、いろいろ感じるところもあったので簡単にメモしておこうと思う。

早朝発、久々の東北道は結構な車の行き来であるが、ほとんど渋滞もなく横浜を出て五時間ほどで田老地区に到着した。途中少しずつ車が増え始め、三陸海岸と内陸部を結ぶ幹線路は復興工事の土砂を運ぶダンプの往来が激しい。

三陸沿岸部はすでにいたるところで防潮堤の工事が始まり、高台居住区の造成も真っ盛りである。工事車両についていきながら警備員に通してもらって、かつてのシーサイドラインを走るとそこはもう防潮堤の外である。旧市街の真ん中を巨大な防潮堤が築かれつつあるのである。

防潮堤の高さは地域により異なるが高いところでは七、八メートルはあるようである。遠目に見ると真新しいコンクリートでなかなか立派だが、近づくとものすごい圧迫感がある。これが延々東北から福島まで延々続くことになるのである。まさに万里の長城に似た国家的大事業（当初予算で 1.6 兆円だそうだが）と思うのだが、あまり国民はその姿を知らないのではないか。走破した五百キロほどの海岸線で完成した部分はなかなか壮観だった。

ただ、少し疑問に思うところがある。そもそもこれだけの高さがあっても過去の津波の高さを防ぐには足りないこと、堤が海への視界を遮り美しいリアス式海岸の景観を隠してしまうこと、そして海が見えないことは海の異変の察知が遅れることにならないか、といった点である。

石巻で日和大橋に続く沿岸道路が大渋滞中に被災した市民とかって話したことがあるが、車から見た海が遠方で真っ黒に盛り上がり、見たこともない異常な光景であったので車を捨てて逃げる決心がついたとのことであった。それでも日和山にたどり着いた時は波が足下に押し寄せ、最後は半分泳ぎながら山の斜面にたどり着いたという。毎日見る海、地震の後見える海がない時、市民はいつ避難の判断ができるのだろうか。それ以外にも地元からはいろいろ不評であると漏れ伝わるところである。

さて私個人的には、防潮堤をせめて道路化できないかと思うのである。そうすれば交差点のない快適なシーサイドラインとなり得るし、車から海の物見もできるであろう。観光も防災にも有意義であるし、沿岸漁港などとの接続も容易になる。また市街地を避けた避難路や、復旧時の足掛かりともなろう。

私が石巻へ被災地支援に向かった際、仙台東道路を通って行ったときの景色を思い出す。実はこの道路の路盤が津波を最後にそこで食い止めたのであり、震災後はでこぼこでありながらも多くの被災地支援車両が走る大幹線となっていた。

現に石巻ではかさ上げと防潮堤を一部道路化するプランとなっている。今更遅いかも知れないが、もう一度多くの識者や市民、当事者が集まって何とかならないかと思うのである。